

【樹木の部屋】

モモ（バラ科スモモ属 *Amygdalus persica*）

和名：モモ **別名**：三千世草(みちよぐさ) **英名**：Peach

バラ目 落葉小高木 **原産地**：中国

花言葉：私はあなたのとりこ、天下無敵、気立ての良さ **花色**：白、桃、紅、複色



← 写真-1 モモ

撮影日：2022年4月1日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん

↓ 写真-2 モモの花

撮影日：2022年4月1日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん



← 写真-3 葉と幼果

撮影日：2022年5月4日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん

原産地は中国黄河上流の高山地帯で、日本では縄文時代には食べられていたそうです。長崎県の伊木力(いきりき)遺跡からモモ(毛桃)の核が出土しており、地層の分析結果から弥生時代以降には栽培が始まっていたと考えられているそうです。

果樹用に出回っている品種は、明治時代以降に中国から入った水蜜桃(すいみつとう)を改良したものが多く、その元祖は岡山県の白桃だそうです。ちなみに、岡山県の県花はモモの花です。

葉は長さ7～16cm、幅3cmほどの細長い楕円形で先端が尖り、縁には細かなギザギザがあり互生します。表面は艶のある深緑ですが、裏面は艶のない淡い緑色になります。花よりやや遅れて茂ります。

樹皮は濃い灰色で、木が若いうちは滑らかですが、樹齢を重ねると不規則に剥離するようになります。幹の直径は30cmほどです。

花期は3月下旬から4月上旬ごろで、直径は3～5cmのウメやサクラよりも大きな花をつけます。淡い紅色が多いようですが、白色から濃紅色まで様々な色のものがあります。花弁は5弁または多重弁で、多くの雄蕊を持ち、花柄は非常に短く、枝に直接着生しているように見えます。

果実は食用、花は観賞され、庭木としての植栽や、あるいは華道で切り花として用いられています。材は割れにくく丈夫なため、箸などに利用され、樹皮の煎汁は草木染めの染料として用いられる事もあるそうです。

剪定

- ・冬の剪定：12月から2月下旬が適期です。ウメやスモモなどと同様、前年枝の葉腋に花芽をつけ、花芽は葉枝を伴わないので、前年枝に直接果実がつきます。混み過ぎないように多すぎる結果枝を間引きます。残す結果枝は、短果枝を除き、側枝のはげ上がりを防ぐため、先端を1/3程度切り戻します。
- ・夏の剪定：モモは夏によく枝が伸びるので、徒長枝を中心に不要な枝を間引き、翌年のために充実した結果枝を育成するよう心がけます。誘引や捻枝をあわせて行うようにします。
- ・摘蕾：着花が多い場合は、短果枝や細い結果枝を中心に、上向きや1節に2花以上ついている蕾を間引きます。

<ちょっと一言>

*モモとハナモモの分類については、バラ目バラ科までは同じですが、属ではモモ属、スモモ属やサクラ属で記述されている文献があります。が、現在の新しい分類では、モモ、ハナモモともにモモ属に分類されているようです。ここでは、フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』による記述を使用し、どちらもモモ属で分類しています。

*ハナモモとモモの区別は、果実用がモモ、花を観賞するモモの園芸種との記述も見受けられます。